

# 第Ⅱ期(2007～2011年度)のツキノワグマの 「特定鳥獣保護管理計画」のモニタリング



冬眠あけの親子グマ



歯根部に形成された年輪(21歳)

# はじめに

西中国地域(島根県, 広島県, 山口県)のツキノワグマは, 孤立分布し, 生息数が少ないことから日本版レッドデータブックにおいて「絶滅のおそれのある地域個体群」とされている。しかし, 近年生息分布域が拡大し, 人里付近へ出没することが多くなり, 養蜂, クリ園, 民家のカキなどへの被害が増加している。

本県では, 2003年度から西中国地域3県共通の目標を盛り込んだ第Ⅰ期の「特定鳥獣保護管理計画」(2003～2006年度)を, 2007年度からは第Ⅱ期の「特定鳥獣保護管理計画」を施行してきた。ここでは, 第Ⅱ期の「特定鳥獣保護管理計画」(2007～2011年度)のモニタリング調査として実施した生息・捕獲実態, 捕獲個体, 人身被害の分析結果について報告する。なお, 人里への出没の多かった2008, 2010年度を「大量出没年」, 出没の少なかった2007, 2009および2011年度を「平常年」とした。

## 生息・捕獲実態

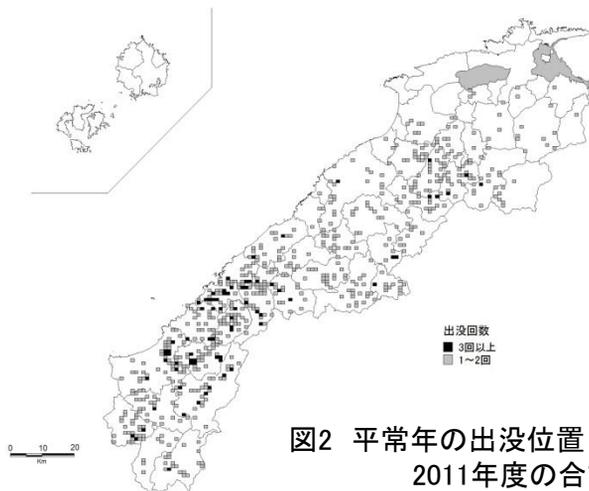


図2 平常年の出没位置(2007, 2009, 2011年度の合計)

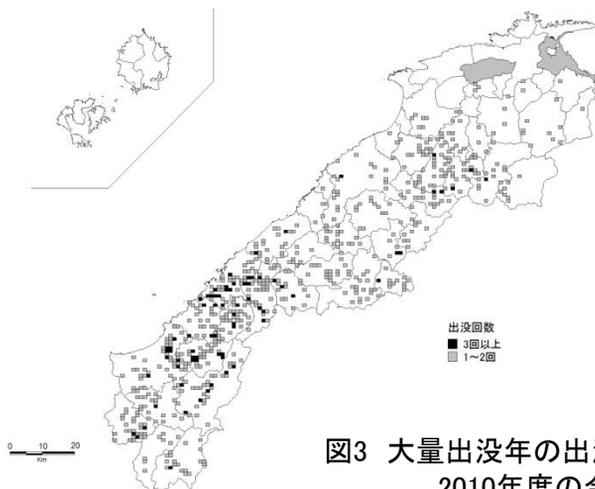


図3 大量出没年の出没位置(2008, 2010年度の合計)

益田, 浜田地域には出没が集中している場所がみられ, とくに西中国山地脊梁部沿いで顕著であった。県央, 雲南地域でも一部に集中している場所があった。これに比べて, 出雲地域での出没はまばらで, 松江地域では奥地のごく少数であった。出没メッシュ数をみると, 平常年の665メッシュに比べて, 大量出没年は913メッシュと沿岸部や市街地付近にまで出没地域が1.5倍も拡大した(図2,3)。

表1 2007～2011年度の捕獲区分別の捕獲数

年度	有害捕獲	錯誤捕獲		緊急避難	交通事故
		箱ワナ	脚くくりワナ		
2007	4 (0) *	13 (11) *	4 (3)	1 (0)	5
2008	17 (4)	32 (29)	10 (8)	1 (0)	6
2009	2 (1)	9 (9)	5 (4)	2 (1)	1
2010	65 (16)	63 (51)	14 (9)	7 (2)	3
2011	3 (1)	14 (11)	11 (7)	1 (0)	2
合計	91 (22)	131 (111)	44 (31)	12 (3)	17

\*うち、捕獲後に放獣したもの。

2007～2011年度の捕獲数は、有害捕獲91頭、箱ワナによる錯誤捕獲131頭、脚くくりワナによる錯誤捕獲44頭、緊急避難13頭の合計279頭であった。なお、この他に交通事故による死亡が16頭あった。また、有害捕獲のうち22頭、錯誤捕獲のうち142頭、緊急避難のうち3頭は、移動・学習放獣を行った(表1)。

## 堅果類の豊凶

表2 堅果類等の豊凶

	2007年	2008	2009	2010	2011
ブナ	×	×	○	×	○
ミズナラ	◎	○	◎	×	○
コナラ	○	×	○	×	○
シバグリ	○	○	○	×	◎
クマノミズキ	◎	×	◎	×	◎

◎: 豊作; ○: 並作; ×: 凶作; -: 不明。

堅果類等の豊凶状況は、凶作と豊・並作がほぼ1年おきであった(表2)。表1の捕獲数と比較すると、捕獲数の多かった2010年は堅果類等が凶作であった。一方、捕獲数の少なかった2007, 2009, 2011年は豊～並作であった。また、2008年は、ミズナラとシバグリは並作傾向であったが、コナラが凶作であったためか大量出没年となった。

## 捕獲個体のモニタリング

捕獲個体の年齢構成は0～25歳であり、大量出没年には平常年に比べて高齢個体や子連れメスが多く捕獲された(図3,4)。胃内容物は、平常年はアリや双子葉植物などの自然由来のものが多かったが、大量出没年はカキやハチの巣などの人里の誘引物が多かった(写真1,2)。栄養状態は、平常年より大量出没年が良好であった。ただし、子連れメスの中には極端に痩せた栄養状態の悪い個体も認めた(図5,6)。

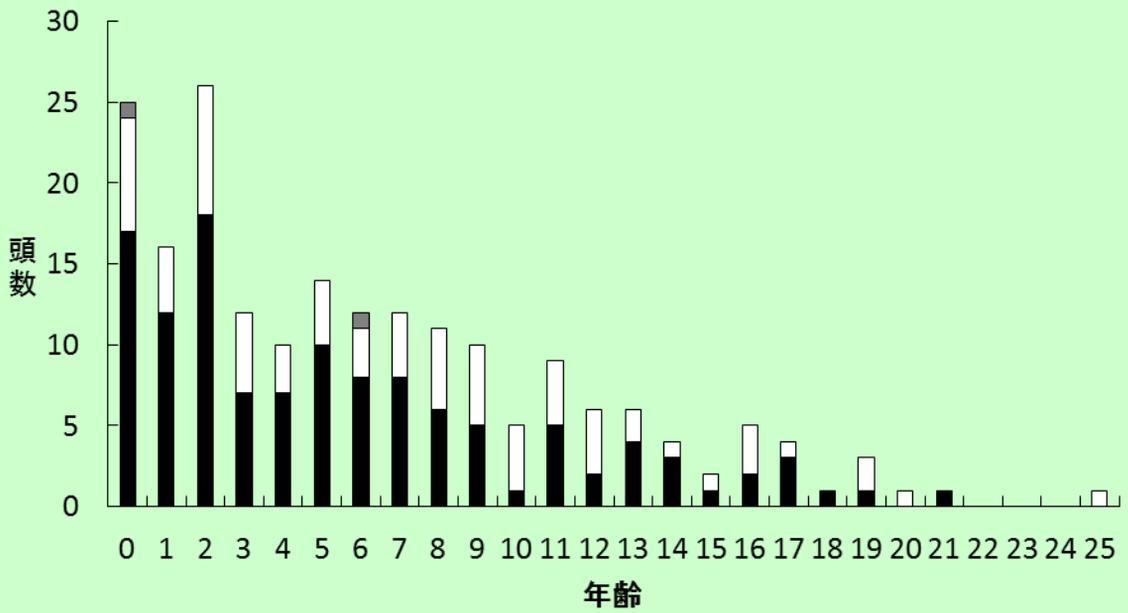


図3 2007～2011年度の捕獲個体の年齢構成

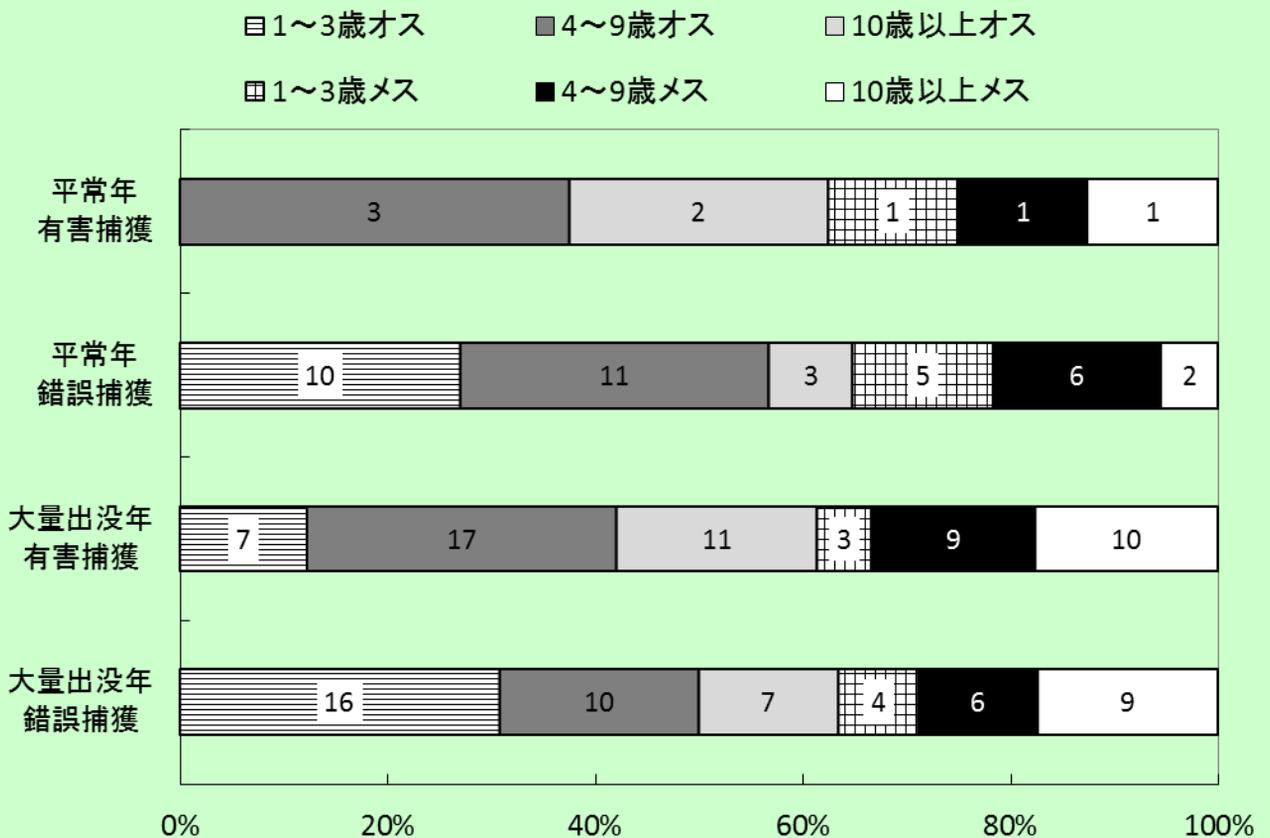


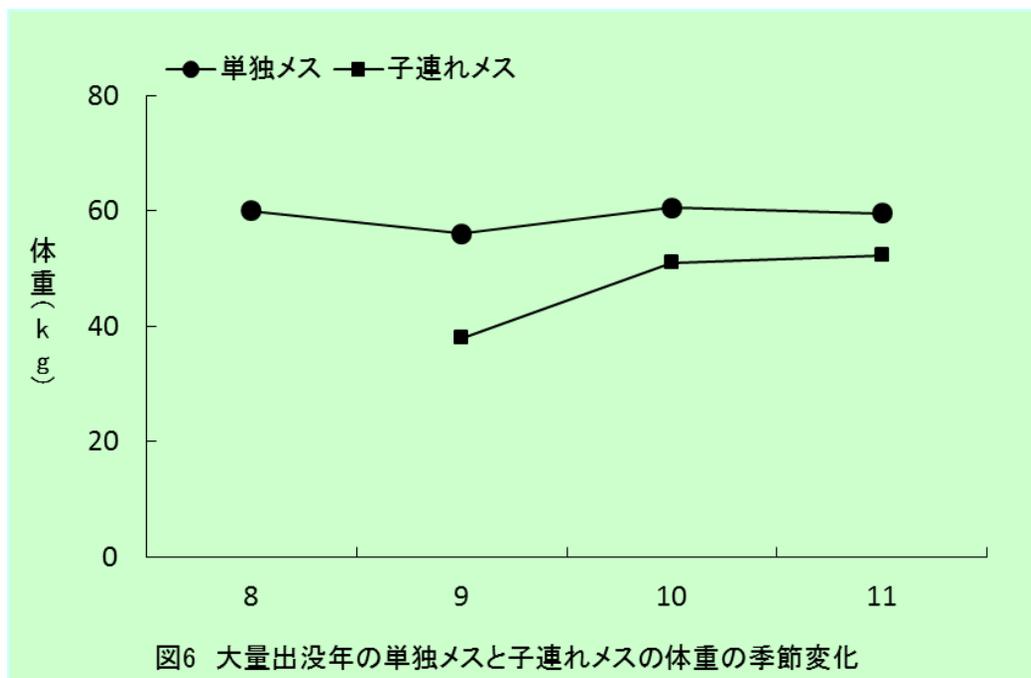
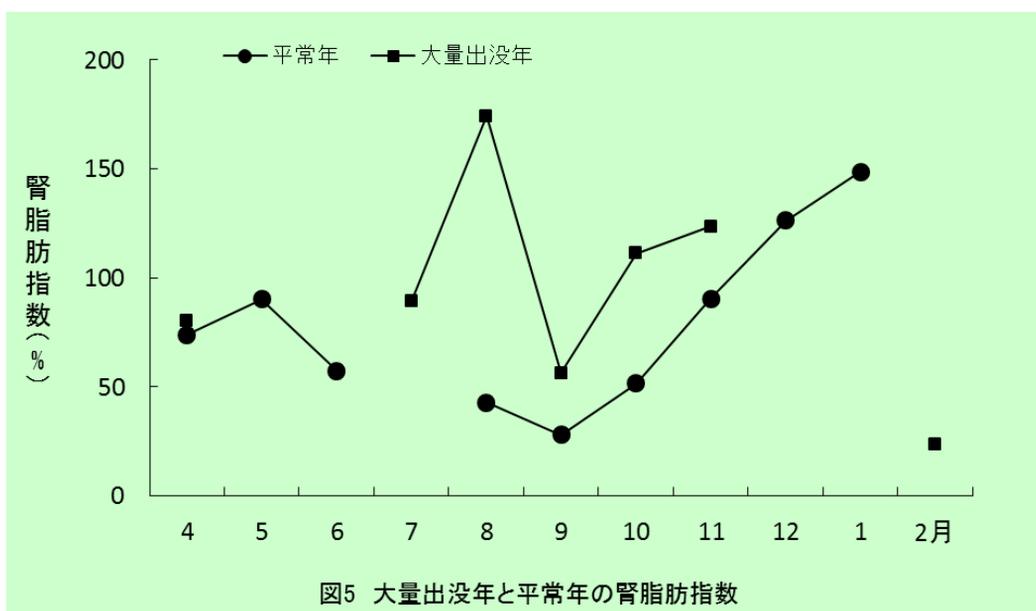
図4 大量出没年と平常年の捕獲区分別の性・年齢構成  
グラフ内の数字はサンプル数



平常年の胃内容物(アリなど)



大量出沒年の胃内容物(カキなど)



# ま と め

モニタリング調査結果から下記のことが明らかとなった。

- ①堅果類などの餌資源は1年おきに凶作年がみられて、人里へ大量に出没して捕獲数が増加した。
- ②大量出没年には、高齢個体や警戒心の高い母グマと0歳子も多数が捕獲された。
- ③胃内容物からは、平常年はアリや双子葉植物などの自然由来のものが多く出現したが、大量出没年はカキやハチの巣などの人里の誘引物が多かった。また、夏期はアリやハチなどの動物質や双子葉草本、秋期は堅果類、液果類、双子葉草本などが重要な餌資源と考えられた。
- ④大量出没年の腎脂肪指数、大腿骨骨髓内脂肪からみた栄養状態は、人里の誘引物を摂食したためか良好な個体が多かったが、有害捕獲個体の中には悪い個体も認められた。また、極端に痩せた子連れメスも多かった。

これらのことから、大量出没年には森林内の餌資源の不足によって、多くの個体の人里の誘引物に誘引されて出没したと考える。また、年によって出没時期が異なったことから、不足した餌資源は年によって変化したと考えられる。